

シリーズ 災害に備える

No.2



問い合わせは 市民安全局
(☎22-9191)へ

毎年6月から10月ごろまでは、集中豪雨や台風などによる風水害の発生しやすい季節です。

全国の気象は、地球温暖化の影響により急激に上昇し、最高気温の記録を相次いで更新しており、年ごとに多雨と小雨の変動が著しく、異常気象が続いています。特に近年は、予測困難なゲリラ豪雨と呼ばれる局地的な短時間豪雨が、各地で甚大な被害をもたらしています。

自分の住んでいる地域が、河川の氾濫や浸水の恐れがないか十分調べておき、日ごろから災害に備えておきましょう。

大雨が予測される場合は次のことに注意しましょう

- 雨に関する情報を注意深く聞く。
- いつでも避難できる服に着替え、非常持出袋などを用意する。
- 停電に備えて懐中電灯や携帯ラジオなどを用意する。
- 浸水に備えて家財道具をできるだけ高い場所に移す。
- 高齢者、乳幼児、病人、障がいのある方などは、できるだけ安全な場所（部屋）に移る。
- 家族でもう一度、避難場所と避難経路を確認しあう。

東北地方太平洋沖地震に関する詐欺などに注意を

耐震工事や修理を持ちかけた高額請求に注意しましょう。大規模な地震の後は地震災害に便乗した勧誘などが横行する恐れがあります。耐震診断や耐震工事、停電への不安に乗じたソーラーシステムの訪問販売などの事例がみられます。

その場ですぐに契約してはいけません。頼んでもいないのに押しつけてきて、しつこく勧誘する業者には特に注意しましょう。

困ったときや被害に遭いそうなきは、すぐに消費生活センターや警察等に相談してください。

問い合わせは 消費生活センター
(☎24-3251)へ

被災地支援本部に届けられた義援金

5月20日現在の受付状況は次のとおりです。ご協力ありがとうございます。

- 義援金 877万7939円
 - 災害ボランティア登録 3人
- 問い合わせは 阿南市社会福祉協議会 (☎23-7288)へ

住民の声を防災計画に反映 沿岸地域自主防災会との 意見交換会を開催

東日本大震災を受け、沿岸地域自主防災会長との意見交換を通じ、今後、市としての津波対策を重点に防災計画の見直しに反映させるとともに、地域防災力の更なる充実・強化を図ってまいりたいと考えています。



意見交換会は、4月20日から5会場で開催し、今回の避難行動や防災体制における問題点や課題点などについて話し合いました。

会議で出されたご意見やご要望は、順次紹介させていただきます。

【那賀川地区（4月20日・那賀川公民館）】

- 堤防の整備
- 津波避難タワーの設置
- 避難所・避難経路の見直し
- 橋梁の耐震診断
- 防災行政無線の整備
- 津波防災マップの見直し
- 避難情報等の連絡体制の構築

※次号では、富岡地区をご紹介します。

何もかもが未知の体験であり想定外だった東北地方太平洋沖地震。私たちは地震大国日本に住んでいることをあらためて強く認識する必要があります。

徳島県ではマグニチュード8・6の南海地震が30年以内に60%の確率で発生することを想定して、かねてより防災対策を講じてきました。

しかしながら、今回の大災害における「想定外」の3文字に足を止めるを得ません。

徳島県では、津波浸水想定の見直し作業に取りかかっています。阿南市でも自主防災会や沿岸地域に立地する民間企業などと意見交換会を開催するなど、防災対策の再構築に取り組んでいます。防災に対する共通理解を深め、有事の際の避難行動などにいかすため、今後、シリーズ「災害に備える」でさまざまな情報を提供していきたいと考えています。

震災に学ぶ

被災地支援活動からのメッセージ



まだまだ支援が必要です

環境整備課

技師 藤井文宏

関西広域連合宮城チーム第5陣として、4月15日から24日までの10日間、宮城県気仙沼市大島へ支援活動に従事してまいりました。大島小学校にて救援物資の品目、個数を記録し、大島13自治会別に世帯割、人数割により平等に配給できるよう、物資を仕分けし翌朝自治会へ搬出します。大島では、すでに電気は復旧していましたが、水道は災害対策本部の試験的通水のみでした。私が大島で見た光景は、地震、津波、火災により港は地盤沈下し、沿岸道路は跡形も無く流され、電柱や街灯は根元から引き裂かれた状態でした。海岸では焼け焦げたがれきが散乱し、防潮堤よりはるか上の山肌にゴミが引っ掛かっており、農地はガラスやがれきが混入し、家屋も車も初めて目にする変わり果てた情景でした。島内の被災した方々は、決して十分ではない食事と、厳しい環境のもと、子どもから高齢者までもが心にさまざまな悲しい痛みを抱えながら、いたわり合い、助け合い、支え合って少しずつ明日を迎える努力をしています。

災害は、大切な家族や日常生活のすべてをも一瞬にして奪い去ってしまうのです。明日にでも発生するかもしれない自然災害に備え、各地域が協同して避難訓練など実施し、各家庭においても指定避難所の再度確認と徒歩による所要時間確認、日常の食料備蓄習慣など、日頃から準備しておくことが大切です。

被災地では、まだまだ子どもから高齢者までさまざまな支援が必要です。私は、大島で感じたこと、考えたことを大切に行動していきたいと思います。最後に、勇気ある地元大島の青年とのバケツリレー、大島の心優しい皆様からのありがとうの言葉、ともに支援活動に従事されたメンバーとのかけがえのない時間に感謝したいと思います。



がんばって生きてください！

市民安全局

事務主任 大川康宏

津波襲来から1カ月、大島小学校の体育館には未だ避難生活を余儀なくされている人々が約160人いた。電気は通じたが水道は止まったまま。延々と続く田んぼの中には漁船や家、車などが散乱し、港は地盤沈下で道路は水没していた。目を疑うような光景が広がっていた。テレビや新聞では伝えきることのできない大津波の被害。阿南市ではどう対策できるのか？さまざまな思いが頭を駆け巡った。

私が宮城県気仙沼市の離島・大島に到着したのは4月9日の午前9時半ごろ。15時間のバスと20分ほどの小型船に揺られ到着した場所だ。

支援に向かったのは、徳島県職員4人と市町職員4人（うち阿南市職員2人）の計8人。大島における救援物資の搬入、仕分けが私たちに与えられた任務だった。水、食料、衛生用品など、毎日次々と運び込まれる救援物資を各自治会へ平等に配分する。余震や寒さ、ホコリが蔓延する過酷な環境下での厳しい肉体労働。しかし、この任務こそ約3,200人が暮らす大島島民の暮らしの支えとなっていた。

私は、今回の支援活動を通じて思ったことがある。もし阿南市で同じような巨大地震と津波が襲来すればどうすればいいのか？

津波、がけ崩れ、地盤沈下、建物倒壊、液状化…。幸いにも大島で生き残られた人々は、緊急地震速報を素直に受け入れ、高台へ避難した人たちだけだった。生きていれば明日につながる。私が大島を後にするとき、不休で献身的に被災者を支える地元職員へ託した言葉を思い出した。「がんばって生きてください！」

今なお現地の苦労を思うと、涙が止まらない。





ブルーシートに書かれた島民の感謝のメッセージ。
(宮城県気仙沼市立大島中学校)

被災地での健康管理について

保健センター

所長補佐 内田和代

徳島県被災地支援チームの保健師チーム（県職員2人、市職員1人）は、4月19日から21日までの3日間、気仙沼市の松岩公民館で、健康相談や健康チェック、避難所の衛生対策などの支援活動を行いました。



松岩公民館に避難されていた方は208人。1歳の幼児や90歳になる高齢者の方もいました。避難者の多くが、明るく、我慢強く、前向きな姿勢だったのがとても印象的でした。しかし、この1カ月余りの避難生活によるストレスと運動不足から体調を崩し、高血圧になったり、不眠・不安感から、安定剤・睡眠剤を内服している方や、がれきやヘドロがもたらす粉塵で、目の炎症や呼吸器疾患を起こしている方もいました。子どもたちもテンションが高い状態や夜泣きが続いたり、不眠の子も見受けられました。市内の医療機関で診療を再開できたのは3分の1程度で、主治医の元に帰れない方が多くいます。現在は、県外の医師による医療救護支援活動が行われています。

がれきの処理では、古釘などによる傷を受ける危険性があり、破傷風を予防するために厚底の靴や厚手の手袋等の着用を呼びかけました。呼吸器の感染予防では、マスクを頻繁に交換したり、手洗い・うがいの徹底に注意しました。食事は、婦人会や中学生ボランティアなどが協力して温かい料理が提供されていました。食事のバランスや塩分にも配慮されていましたが、高血圧等の持病を持っている方にとっての塩分摂取としては多くなりがちです。

今回の経験を糧に、阿南市が被災した場合を想定した保健分野での対策について考えて行きたいと思います。今回、支援活動の機会を与えてくださった皆様に感謝するとともに、被災地の1日も早い復興を願っています。

今一度考える

消防署第一消防課

課長補佐 平田晃士

3月14日11時28分、総務省消防庁から「緊急消防援助隊、徳島県隊出動」の指示が下り、阿南市消防本部から救急隊1隊3人が徳島県隊に加わり出動しました。約3時間半後の15時、集結場所である徳島県消防学校（北島町）から被災地に向け出発。徳島県隊57人が宮城県塩釜地区に到着したのは、出発してから46時間後の16日13時でした。



周囲を見渡すにつれ、16年前の1月17日阪神淡路大震災発生直後のすさまじい光景が回想されました。泥まみれで歪んだ道路、全壊半壊の無残な住居、それらにもたれるように折り重なった車両、津波の高さを示す水位の痕、うちあげられた船舶などを目の当りにし、巨大な自然災害の恐怖に絶句しました。

ただちに活動を開始。19日までの4日間、救急搬送等の援助活動を行いました。

援助隊活動からの帰県途中の食事中に隊員が言った「ご飯と味噌汁は格別ですね」を耳にした時、平常生活の有り難さと、隊員の受けた惨事ストレスの緩和を考慮せずにはいられませんでした。

21日、消防本部に帰庁するまでの8日間、私はもとより隊員にとっても貴重な経験になりました。この経験は「東北地方で起きたこと」だけで終わるのではなく、私の消防人生に生かさなければなりません。

今後30年以内に60%の確率で発生が予測される南海地震。皆さんは、自分の身の安全を守れますか。非常用持出袋は準備できていますか。避難場所や避難経路は確認できていますか。地域（自主防災組織）等でのコミュニケーションは図られていますか。明日にも発生するかもしれない南海地震に備えて、今一度考えてください。